

- 2 - 1 単元「海の命」(柏崎市立中通小学校 第 6 学年)

1 単元指導計画

(

1 - 1 単元名「海の命」(全 6 時間)

担当者 教諭 松崎 藤美

1 - 2 単元設定の理由

(1) 児童の実態

児童は、6年生になってからは「やまなし」で、比喩や色彩表現・対比などの表現の工夫や作品の構成を学習してきた。また、「生と死」という主題についても学習したが、主題について自分を重ね合わせて考えるような深い読み取りはできなかった。

子どもたちは、文学作品は好きであり、興味を持って取り組んでいる。しかし、登場人物の生き方や考え方を自分と比べたり、重ねたりして、深く読み取りことのできない子どもが多い。

「命」については、人の話や本を読んだなかでの意識しかなく、感想は述べられるが、自分と置き換えて比べ、自分自身を重ね合わせて考えることはできない。

(2) 教師の願い

この作品は、海を舞台に、主人公「太一」の成長の姿が描かれている。起承転結のはっきりとした構成であり、太一の成長の変化が分かり易く描かれている。この物語を学習することで、一人の人間の成長には、周囲の人間の存在や自分を成長させるなんらかの出来事があることに気付かせていきたい。卒業の時期を迎えるに当たって、自分も太一のように周囲の人間の存在や出来事で成長していくことについて、考えることができるようにしたい。また、自分自身の内面の成長を見直すきっかけとなるように、学習に取り組ませたい。

指導に当たっては、最初に太一を中心に周囲の人間(父・母・与吉じいさ)を整理する。ワークシートに、人物どうしの関係をまとめ、周囲の人間の言葉や行動が分かる言葉や文を書き抜くことで、それぞれの人物の生き方や考え方が、太一の成長に影響を与えたことを読み取る。

次に、太一のクエに対する考え方の変化を、言葉や文章から読み取っていく。作品の山場である場面「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」を話し合わせる。太一のクエの存在の変化から、太一が本物の漁師になったことをつかむ。また、「海の命」の表しているものをとらえ、自分なりの考えをまとめさせたい。

最後に、「命」について太一の考え方と自分の考え方を比較し、自分の体験を重ね合わせながら、感想を書かせたい。また、同じ作者の作品や「命」をテーマとした作品を紹介し、文学作品に親しむ態度を育てたい。

1 - 3 単元の目標

主人公が本物の漁師として成長する姿を周囲の人物の行動や考え方からや大魚（クエ）との出会いから読み取り、「命」について自分なりに考えを深め、文学作品に親しもうとする。

1 - 4 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度

文学作品に興味を持ち、親しもうとする。

話す・聞く能力

「なぜ太一はクエを殺さなかったか」という話し合いで、根拠を挙げて自分の意見を述べることできる。

学習を振り返って感想を発表することができる。

書く能力

題名や登場人物の行動・言葉について感想を書くことができる。

題名「海の命」は何を表しているか、自分の考えを書くことができる。

「命」について自分の経験やこの学習で学んだことを関連付けながら書くことができる

読む能力

周囲の人間（父・母・与吉じいさん）のそれぞれの生き方や考え方を読み取ることができる。

周囲の人間（父・母・与吉じいさん）それぞれの生き方や考え方が、主人公の成長にどう関わったかを読み取ることができる。

主人公のクエに対する心の変化を、本文の言葉や行動から読み取ることができる。

言葉についての知識・理解・技能

新出漢字を正しく読んだり書いたりする。

1 - 5 学習過程と評価計画

学習活動	支援 (方法・内容)	評価規準					評価資料
		関心意欲態度	話す・聞く	書く	読む	言語	
1 全文を通読し、感想を書く。(1時間) 全文を通読する。 題名や登場人物の行動・言葉を中心に心に残ったことを書く。	<ul style="list-style-type: none"> 一読後に感想を書くことを予告する。 感想カードに項目を設定して書かせ 感想カードは、回収して子どもたちがどこに心を動かされたか、また疑問に思ったところはどこか をまとめ、これらの学習のめあてとし、						感想のカード 1

	<p>学習の見通しを立てる。この感想カードは最後のまとめに使う。</p>						
<p>新出漢字を学習する。</p>	<p>・新出漢字や分からない意味の言葉を辞典で調べさせる。</p>						漢字ノート
<p>2 父・母・与吉じいさの言葉や行動からそれぞれの生き方や考え方が分かる。 (1時間) 主人公と登場人物について整理し、各人物の生き方や考え方が分かる。</p>	<p>・主人公、登場人物の関係をワークシートにまとめ、周囲の人物の生き方や考え方が分かる言葉や行動に線を引き、書き抜かせる。</p>						ワークシート
<p>各人物の考え方や生き方が太一とどう関わっているか考えて書く。</p>	<p>・書き抜いた言葉や言動から各人物の考え方や生き方をまとめさせ、成長とどう関わっているか考えさせる。</p>						ワークシート
<p>3 クエに対する考え方の変化を太一の行動や言葉から見つける。(1時間) 太一がクエに対する気持ちが変わったところを文から見つける。</p>	<p>・クエがどのように描かれているかワークシートに書き抜かせる。 ・太一の考え方が変わった場面を、行動や言葉を根拠にしながらまとめる。</p>						ワークシート ワークシート
<p>作品の山場「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」という話し合いをする。</p>	<p>・クエは、太一にとってどんな存在だったのか、考えさせ、これを根拠として話し合う。 ・太一の成長を読み取らせる。</p>						発表の様子 の観察
<p>4 学習を振り返る。(1時間) どのような感想を持ったか話し合う。</p>	<p>・この学習を通してどのような感想を持ったか一人一人発表する。 ・題名「海の命」が意味するところについて学習したことを生かして、自分の考えを書く。</p>						発表の様子 の観察 感想のカード

5 「命」について感想を深める。(1時間) 「命」について文章を書く。	・感想カード と比べさせる。						感想文
6 文学作品に興味を持つ。(1時間、一部課外) 「命」をテーマとした作品を読む。	・学習したことや体験をこれまでの自分と重ね合わせながら文を書かせる。 ・作者の他の作品「山の命」を紹介し、他にも「命」をテーマとした作品を紹介し、作品を読ませる。(読書月間と関連させる)						読書の様子

1 - 6 評価基準

学習活動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
				A (3)	B (2)	C (1)
1 全文を通読し、感想を書く。 全文を通読して、題名や登場人物の行動・言葉を中心に心に残ったことを書く。 新出漢字を学習する。	書く能力 言語についての知識・理解	題名や登場人物の行動・言葉について感想を書くことができる。 新出漢字を正しく読んだり書いたりする。	感想カード (項目) ・題名について考えたこと ・登場人物の行動や言葉に感動したところ ・心の残った場面 ・疑問に思ったところ 漢字ノート	4つの項目から3つ以上書いてある。 新出漢字の読み方・書き方をほぼ80%以上正しく書いている。	4つの項目から2つ感想を書いている。 新出漢字の読み方・書き方を70%~79%書いている。	感想は書いてあるが、項目がひとつであったり、あるいははずれた内容を書いたりしている。 新出漢字の読み方・書き方が70%に満たない。
2 父・母・与吉じさの言葉や行動から生き方や考え方を読み取る。 各人物の生き方や考え方が分かる言葉や行動を書き抜き、それぞれの生き方や考え方を読み取る。	読む能力	周囲の人間(父・母・与吉じいさん)のそれぞれの生き方や考え方を読みとることができる。	ワークシート (内容) ・父(海のめぐみ) ・与吉(千匹に一匹) ・母(おそろ)	各人物の生き方や考え方が分かる言葉や行動を3つ正確に書き抜いている。	各人物の生き方や考え方が分かる言葉や行動を1~2つ書き抜いている。	各人物の生き方や考え方が分かる言葉や行動を1~2つ書き抜いてない。

<p>各人物の考え方や生き方が太一の成長とどう関わっているか考えて書く。</p>	<p>読む能力</p>	<p>周囲の人間（父・母・与吉じいさん）のそれぞれの生き方や考え方が、主人公の成長にどう関わったかを読み取ることができる。</p>	<p>ワークシート（内容） ・父（海のめぐみ）与吉（千匹に一匹）という考えが太一に海に生きる漁師としての心を教えてくれたこと。</p>	<p>生き方や考え方が、太一の漁師としての成長と関わって書いてある。</p>	<p>生き方や考え方は書いてあるが、太一の成長と関わって書かない。</p>	<p>生き方や考え方が、書いてない。</p>
<p>3 太一のクエに対する考えの変化を言葉や行動を手がかりとして読み取る。</p> <p>太一がクエに対する気持ちが変わったところを文から見つける。</p> <p>「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」という話し合いをする。</p>	<p>読む能力</p> <p>話す・聞く能力</p>	<p>太一のクエに対する考えの変化を、本文の言葉や行動を手がかりとして読み取ることができる。</p> <p>「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」という話し合いで、根拠を挙げて自分の意見を述べることができる。</p>	<p>ワークシート（観点） ・泣きそうほほえみえがお ・もりを足の方に ・おとうここにおられたのですか</p> <p>発表の観察（根拠） ・クエが海の命だと思ってほほえんだから ・ほほえんだのは、クエに父を感じたから ・太一が父やじいさのような本物の漁師になったから ・クエが父を破ったものから海の命だと変化したから</p>	<p>太一のクエに対する気持ちが変わったところを、言葉や行動からみつめて3つ正確にワークシートに書いてある。</p> <p>太一の行動や言葉から3点以上根拠を挙げて、自分の考えを発表している。</p>	<p>太一のクエに対する気持ちが変わったところを、言葉や行動から1～2ワークシートに書いてある。</p> <p>自分の考えを発表しているが、根拠は、2つまでである。</p>	<p>太一の行動や言葉は見つけられるが、気持ちが変わったところを見つけてない。</p> <p>自分の考えを発表していない。</p>
<p>4 学習を振り返って（1時間） どのような感想を持ったか話し合う。</p> <p>題名「海の命」とは何を表現し</p>	<p>話す・聞く能力</p> <p>書く能力</p>	<p>学習を振り返って感想を発表することができる。</p> <p>題名「海の命」は何を表しているか、</p>	<p>発表の態度の観察</p> <p>感想のカード</p>	<p>学習したことを生かして、初発の感想から考えを深めて発表している。</p> <p>「海の命」を表してい</p>	<p>感想を発表できるが、初発の感想から考えが深まっていない。</p> <p>「海の命」を表してい</p>	<p>感想を発表していない。</p> <p>「海の命」を書いてい</p>

ているか、自分の考えを書く。		自分の考えを書くことができる。		るものを3つ書いている。	るものを1～2つ書いている。	ない。
5「命」について感想を深める（2時間） 「命」について文章を書く	書く能力	「命」について自分の経験やこの学習で学んだことを関連付けながら書くことができる。	感想文	「命」について自分の経験やこの学習で学んだことを関連づけながら書いている	「命」について自分の経験やこの学習で学んだことをどれかひとつを関連づけながら書いている	「命」について一般的な感想しか書いてない。
他の作品を読む	関心・意欲・態度	文学作品に興味を持ち、親しもうとする。	読書の様子	命のテーマの作品2つを読んでいる。	命のテーマの作品一つを読んでいる。	他の作品を読んでいない。

2 授業と評価の実践

2 - 1 指導と評価の一体化の実践

学習活動1	全文を通読し、感想を書く。
-------	---------------

(1) 指導・学習の過程

クラス全員がこの時間に初めて通読した。作者の立松和平さんを知っていた児童は、いなかった。教師が音読する前に、感想カードを配り、感想の項目を確認した。教師の音読後に、この項目について感想を書いてもらうことを予告した。教師の音読は10分程度であった。みんな真剣に聞いていた。音読の後、意味の分からない言葉「瀬」・「こときれる」を辞書で確認した。その後で、感想カードの各項目に感想を書いた。子どもたちは、すぐに、感想カードに取り組んだ。感想をまとめて、これからの学習の見通しを立てた。

(2) 評価結果

感想カード を評価資料として評価した結果、次のようになった。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
書く能力	題名や登場人物の行動・言葉について感想を書くことができる。	人	9人	0人

項目を4つにして、自分が書き易い項目から取り組ませた。項目は、（心に残ったことや場面）（不思議に思ったこと）（題名について考えたこと）（他に考えたこと）であった。

項目（心に残ったところ）については、全員が感想を書いた。各人物の生き方や考え

方をとらえる言葉を書き抜いている子どもが多かった。

- ・「海のめぐみ」・・・ 5人
- ・「千匹に一匹」・・・ 3人
- ・太一とクエの対決場面・・・ 6人
- ・なぜ太一はクエを殺さなかったのか・・・ 5人

反対に、書けなかったのは、項目（題名について考えたこと）であり、評価が A の児童しか書けなかった。今までの学習のなかでは、題名について考える事が少なかったことが分かった。この題名の意味を考えることが、これからの学習の見通しを立てる大切な指導であると考えた。

（ 3 ）指導の改善と実施

感想を黒板で整理し、これからの学習の計画を話した。題名の「海の命」について書けなかった児童にも感想を聞き、この題名の意味を考えることが大切であると教えた。児童たちは、あらすじをつかむと同時に、学習の見通しを立てることができた。この感想カードは、最後の時間に再び使うことを伝え、学習した後に、題名の意味をどのくらい考えられるか、また作品の感想を深めることができるかを、学習のめあてとした。

（ 4 ）評価結果

漢字スキルノートを評価資料として評価した結果、次のようになった。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
言語について に知識・理解 ・技能	新出漢字を正しく読んだり書いたりする。	8人	2人	0人

（ 5 ）指導の改善と実施

B評価の児童2人については、まちがえたところを指導し、もう一回やり直しをさせて定着を図った。

学習活動2 父・母・与吉の言葉や行動からそれぞれの生き方や考え方が分かる。

（ 1 ）指導・学習の過程

音読を宿題とした。この時間までに、児童たちは3回は通読している。まず、登場人物を確認し、太一を中心として図に書かせた。ここから各人物と太一の関係が分かった。次に、登場人物3人の生き方や考え方が分かる文章を書き抜かせてワークシートにまとめていった。この活動は、個人差がでてしまい、全員が終了するまで25分ほど時間かかった。黒板でまとめると45分が終わりそうであった。そのために、主人公の成長にどう関わったかは、次の学習の時間にかかってしまった。

(2) 評価結果

ワークシート を評価資料として評価した結果、次のようになった。

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評 価 基 準		
		A(3)	B(2)	C(1)
読む能力	周囲の人間(父・母・与吉いさん)のそれぞれの人物の生き方や考え方を読みとることができる。	8人	2人	0人

時間はかかったが、父・与吉・母3人の生き方・考え方が分かる言葉や行動を10人が書き抜くことができた。B評価の児童2人は、母の考え方が見つけられなかった。

(3) 指導の改善と実施

B評価の児童については、母の叙述の部分を確認させた。この学習は、思ったより時間がかかってしまった。児童の実態から、2時間続きにしなければならなかった。

(4) 評価結果

ワークシート を評価資料として評価した結果、次のようになった。

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評 価 基 準		
		A(3)	B(2)	C(1)
読む能力	周囲の人間(父・母・与吉いさん)のそれぞれの人物の生き方や考え方が、主人公の成長にどう関わったかを読み取ることができる。	1人	9人	0人

主人公の成長にどう関わったかの発問は、難しかった。A評価の児童は、父と与吉の共通点を挙げ、二人が太一を本物の漁師にしたことと、海の命を大切にしていることを挙げていた。他の9人の児童は、太一の成長を漁師としての技術の向上の面のみとしてとらえていた。父や与吉が太一の心の部分を教えていたことが読み取られていなかった。母については、一人しか記述できなかった。

(5) 指導の改善と実施

この評価から、まず二人(父・与吉)の生き方や考え方を一人一人まとめていった。A評価の児童の考え方を発表させ、二人の共通している生き方や考え方を挙げさせた。二人が、漁では魚をたくさんとらないことや、海を大切にしていること・二人とも海に帰る(死んでしまう)ことが挙げられた。この話し合いを通して、父・与吉が海の命を大切にしている生き方や考え方が、太一を村一番の漁師に成長させたことが分かった。

母については、なかなかうまくまとめる事ができなかった。母は、これから山場(クライマックス)の展開で、大切な役割を果たしていることを確認した。

学習活動3 太一のクエに対する考え方の変化を言葉や行動を手がかりとして読み取る。
--

(1) 指導・学習の過程

太一とクエがどのように描かれているか、ワークシートにまとめ、そのなかで太一のク

エに対する考えが変わったところを見つける活動を行った。書き抜きは、予定よりもかかってしまった。しかし、この活動が太一の変化をつかむ手がかりとなる。全員に時間を確保して書き抜かせた。個人差があるので、終わった児童から黒板に書かせた。その後、全員で確認した。この書き抜きをもとに考えが変わったところを三つ挙げて考えさせた。観点の対比の表現に気付かなかったが、児童たちは多くの考えを発表した。

最後に、この作品の山場である「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」を根拠を挙げて話し合いをした。9人の子どもがクエを「海の命」・父・与吉であることを根拠にあげていた。予定より時間がかかってしまい、みんなで話し合う時間が足らなかったのが、残念だった。

(2) 評価結果

ワークシート を評価資料として評価した結果、次のようになった。

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評 価 基 準		
		A(3)	B(2)	C(1)
読む能力	太一のクエに対する心の変化を、本文の言葉や行動から読み取ることができる。	5人	4人	2人

時間はかかったが、この書き抜きを手がかりにして、太一の心の変化を読み取ることができた。心が変わった言葉や行動の評価基準の観点を三つと考えていたが、児童はそれ以上に心が変わった場面を挙げて発表した。

- ・こんな感情になったのははじめてだ・・・7人
- ・水の中でふっとほほえんだ・・・6人
- ・「おとう、ここにおられたのですか」・・・6人
- ・大魚はこの海の命だと思えた・・・8人
- ・太一は泣きそうになった・・・6人
- ・もう一回えがおをつくった・・・5人

C 評価の児童は、線をつけていてそれらしいことを書こうとしていた。二人とも心の変化の場面を見つけられず、ワークシートに書けなかった。

(3) 指導の改善と実施

C 評価の児童には、変わったところはひとつでないことを指導した。C 評価の児童は、クラスみんなの発表によって分かったようで、次時のワークシートには、きちんと書いてあった。また、対比の表現について指導した。読み取りでは評価基準の観点を決めても、子どもたちのほうがたくさん見つけ出し、話し合いが活発になることがある。こういう活動を大切にしていきたいし、評価基準があるからこそ、指導できると感じた。

(4) 評価結果

話し合いの様子を観察した結果を評価とした。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
話す・聞く能力	「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」という話し合いで、根拠を挙げて自分の意見を述べるができる。	3人	5人	2人

・太一はクエのことを海の命だと思ったので、与吉や父のように殺すことができなかった。・・・6人

・海の命を大切にしなければならないと思った・・・6人

・クエを父だと思った・・・5人

・父や与吉のように海の命を大切にしなければならない・・・5人

発言がなかったのは、前活動でC評価の評価の児童だった。しかし、シートには根拠を書いたあとがあり、前活動を理解して、自分なりに生かしていた事が分かった。

(3) 指導の改善と実施

学習活動3を1時間ですることは大変であった。読み取りでは、児童の発表のなかには、評価の観点にはないものが多い。評価の観点を設定するときには、やはり教材研究を深めてねらいをしっかりとおさえて、授業に臨まなくてはならない。しかし、予想しない発言がでて、評価の観点があることで、児童達の発言を受け止めることができた。また、対比の表現が理解できていないことも分かった。評価と指導の一体化の大切さを感じた。この授業は、1時間では終わらずに2時間で計画すべきであったと反省される。この授業のあとに、ワークシートをまとめて自己評価を行った。

学習活動4 学習を振り返る

(1) 指導・学習の過程

この学習を行う前、突然10月23日に新潟中越大地震が柏崎市にもおそった。連日の授業短縮や、繰り返される余震に児童の気持ち不安定なために、この学習は予定より1週間ほど遅らせて実施した。そのため、もう一回本文を読み、今までのワークシートの振り返りを行った。その後、「海の命」の学習を振り返り、感想をどのくらい深めたかみんなで話し合った。この話し合いと自分の感想カードをもとに学習を振り返った。

(2) 評価結果

話し合いの様子を観察した結果を評価とした。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
話す・聞く能力	学習を振り返って感想を発表することができる。	8人	2人	0人

一人一人が発表できた。前の学習が生かして、いろいろな意見が発表された。

- ・「海の命」の本当の意味が分かった・・・8人
- ・クエがなにを表しているか分からなかったが、分かった・・・8人
- ・太一がなぜクエを殺さなかったか分かった・・・7人
- ・クエとの対決で太一の気持ちが変わったところがおもしろかった・・・2人
- ・太一が「海の命」を大切にす漁師となったことが分かった・・・2人
- ・「命」のとらえ方の変化が分かった・・・1人
- ・与吉や太一の父がなぜたくさん魚を捕らない1人が分かった・・・1人
- ・クエとの対決が一番心に残った・・・1人

一週間ほど過ぎていたが、初発の感想と比べてみて、読み取りが深まったことが全員確認できた。

(3) 指導の改善と実施

感想カード と比べてみることは、とても有効であった。特に、疑問に思ったことが分かったという発表が多かった。C 評価の多かった児童も友達の意見や黒板でのまとめをすることにより、太一の変化を読み取ることができるようになった。この児童の感想は、

- ・太一がクエを殺さない理由がわかった。
- ・題名の意味が分かった。

と書いてあり、読み取りができたことを示している。

(4) 評価結果

感想カード 評価結果を観察した結果を評価とした。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
書く能力	題名「海の命」は何を表しているか、自分の考えを書くことができる。(クエ・父・与吉・海の恵・海の生き物)	10人	0人	0人

話し合いが終わった後、感想カード に「海の命」を表しているものを書かせた。

- ・海にいきているもの・・・8人
- ・父や与吉・・・8人
- ・全ての命や生きているもの・・・6人
- ・海の恵・・・5人
- ・クエ・・・2人
- ・先祖や名前も知らないものたち・・・2人

(5) 指導の改善と実施

10人すべてが A 評価でねらいは達成されたと考える。C 評価の児童も3つ書くことができ、学習の成果があった。

学習活動5 「命」について感想を深める

(1) 指導・学習の過程

児童たちは、思いがけない新潟県中越大地震により、自分たちの経験と学習を結びつけて「命」について考えることができた。幸いにも柏崎市は大きな被害がなく、自分たちの学校や家も被害は少なかった。しかし、毎日のようにテレビで報道される県内の地震の被害の様子や、五才の幼児が生き埋めの状態になり、奇跡的に助かった出来事に、子ども達は自分のことのように心を痛めた。自分たちも引き続く余震の経験から、「命」について身近に考え直す機会となった。この体験を通して、「命」について自分の体験と置き換え、比べてみることで、「命」について感想文を書くことができた。

学習が終わった11月は、校内読書月間である。この機会を生かして、「命」をテーマとした作品を紹介し、読書するように呼びかけた。しかし、学校の図書室では「命」をテーマにした本は少ないので、柏崎市立図書館から協力していただいた。柏崎市立図書館から10冊の本を借り、子ども達に紹介した。子ども達はこんなにあるのかと驚き、自分の興味のある本を選び、読書月間にこれらの本を読んでいった。

(2) 評価結果

感想文を評価資料として結果を評価とした。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
書く能力	「命」について、自分の経験やこの学習で学んだことを、関連付けながら書くことができる。	10人	0人	0人

10人の子どもが地震の体験を結びつけて書いた。また、学習で学んだことを書いてあった。

ぼくは、「海の命」の学習や、新潟中越地震の体験を通じて「命」についてこう考えました。

「海の命」の学習を通して与吉じいさやお父さん、そして太一のように海だけではなく、すべての命が大切なんだと思いました。すべての「命」ということを感じました。今、自分がこうして生きていることに感謝し、自分もそのなかの一部であることを思いました。命を大切に、せいいっぱい生きたいです。

わたしは、地震が来る前は、こんな大災害が起こるなんて考えもしなかった。三人の親子が生き埋めのニュースを見て、もし、自分達もあのようなことになっていたらどうなるだろうかと、改めて考えた。人間は死のとなりなんだと思った。本当に命は大切にしなければならないと思った。

今までは、災害や死など他人の事であり、自分には関係ないという気持ちがあった。今回の地震や余震で、ひとつの命の重さを感じた。すべての命が大切だと思った。

「海の命」の学習や今回の地震の体験を、生かしていきたいと思った。

(3) 指導の改善と実施

10人の児童たちの書いた感想文は、地震の体験と命の大切さを結びつけた感想文で

あった。やや、地震の感想が多くなってしまったところもあるが、「海の命」の学習が生かされてこそ、このような感想文が書けたと思う。

(4) 評価結果

読書の様子を評価資料として結果を評価とした。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準	評価基準		
		A(3)	B(2)	C(1)
関心・意欲・態度	文学作品に興味を持ち、親しもうとする。	10人	0人	0人

読書月間の間に教師が紹介した「命」に関わる本を読んだのは、

- ・ 5冊・・・2人
- ・ 4冊・・・3人
- ・ 3冊・・・3人
- ・ 2冊・・・2人

「山の命」は全員読んだ。読書月間で一番おもしろかった本で、命に関わる本を挙げたのは、6人だった。

2 - 2 自己学習力の向上に向けた評価の工夫

(1) 第1レベルの工夫

評価基準を予め説明してから、自己評価を行う工夫

ワークシートを使う場合は、「この考えを3つ書けたらA」「2つみつけたらB」というように具体的に評価基準を提示してそれに基づいて自己評価をさせた。国語では初めてのやり方であったが、子どもたちは意欲的にこの方法を取り組んだ。子どもたちの感想を挙げてみる。

- ・ 今日、こんな学習をするんだと分かったと安心して勉強できる。
- ・ 3つ以上だとA、とか2つならB、と先生が言うとAになりたいという気持ちが起こって、一生懸命考えた。
- ・ 勉強の内容がはっきりわかってよかった。
- ・ 今日、何を勉強してどんなことが分かったか、分からなかったか、はっきりしてよかった。
- ・ あれこれ考えるのが楽しい。
- ・ 友達がいろいろなことを考えて発表するのがよかった。自分もいっぱい発表したいと思った。

ワークシートに教師が評価基準が分かるようにコメントし、教師の意図が分かるようにする工夫

ワークシートに自分の考えが明確に表れている文章には、花丸やコメントを入れて子どもを励ました。

Ｃ評価の児童には、「こういう事がわかるといいね」「pの行に、書いてあるよ」などコメントをし、分からないところや思い違いをなくすように支援した。

学習過程のなかで、ポートフォリオを活用し、振り返りに活用する工夫。

初めの感想がいかに深まったか、学習後に感想を書くことは大切な国語学習の一つである。最後の感想を書く時に、一人一人が自分のポートフォリオを活用した。

自分のワークシートや感想カードを見ながら、「海の命」の題名の意味や「命」の考え方が深まったことなど、一人一人が学習の後を振り返った。その後に、感想を書くことができた。学習過程のなかで、どのように読み取りを深めてきたか、一人一人確認できた。

2 - 3 外部への説明責任に向けた評価の工夫

(1) 単元の総括的評価結果

本単元における総括的評価は、「関心・意欲・態度」は、学習活動5 - 、 「話す・聞く能力」は、学習活動3 - 学習活動4 - の総和、「書く能力」は、学習活動1 - 、学習活動4 - 、学習活動5 - の総和、「読む能力」は、学習活動2 - 、2 - 、学習活動3 - の総和、「言語についての知識・理解・技能」は、学習活動1 - で行なうことにした。その結果、以下の通りである。

国語への関心・意欲・態度

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは10人、Bは0人、Cは0人であった。B以上は合計10人となる。このため、学年全体としては100%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。

話す・聞く能力

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは6人、Bは3人、Cは1人であった。B以上は合計9人となる。このため、学年全体としては90%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。

なお、Cの子どもは、クエの存在の変化を挙げられなかったことで、自分の意見を発表することができなかった。前学習活動の支援が不足していたことが考えられる。自分の考えをしっかりと持つために学習の内容の定着を図ることが求められる。

書く能力

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは8人、Bは2人、Cは0人であった。B以上は合計10人となる。このため、学年全体としては100%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。初めの感想は書きにくかったが、読み取りが深まり、「命」についても地震の体験もあわせて学習効果があがったものと思われる。したがって、単元を

通して、書く能力の育成は目標を達成したと判断できる。

読む能力

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは4人、Bは6人、Cは0人であった。B以上は合計100人となる。このため、学年全体としては100%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。

言葉についての知識・理解・技能

単元における個人ごとの総括的評価結果(=評定)を基にみると、Aは8人、Bは2人、Cは0人であった。B以上は合計10人となる。このため、学年全体としては100%が目標を達成したと考えられる。したがって、単元を通して、関心・意欲・態度の育成は目標を達成したと判断できる。

(2) 単元における個人内評価結果

次に、この単元の個人内評価結果をA児、B児、C児の3名を事例にしながら、個人内評価の特質について検討する。そのために、まず3名の児童の<個人評価結果表>を紹介すれば、次のようである。

個人評価結果表

		学習活動1	学習活動2	学習活動3	学習活動4	学習活動5	評定	
A児	関心意欲態度					<u>3</u>	A	
	話す・聞く			<u>3</u>	<u>3</u>		A	
	書く	<u>2</u>			<u>3</u>	<u>3</u>	A	
	読む		<u>3</u>	<u>2</u>	<u>3</u>		A	
	言語	<u>3</u>					A	
B児	関心意欲態度					<u>3</u>	A	
	話す・聞く			<u>2</u>	2		B	
	書く	<u>2</u>			<u>3</u>	<u>3</u>	A	
	読む		<u>2</u>	<u>2</u>	<u>3</u>		B	
	言語	<u>3</u>					A	
C児	関心意欲態度					<u>3</u>	A	
	話す・聞く				<u>1</u>	<u>2</u>	C	
	書く	<u>2</u>				<u>2</u>	<u>3</u>	B
	読む		<u>2</u>	<u>2</u>	<u>1</u>			B
	言語	<u>2</u>						B

(注) 総括的評価(評定)に用いた評価結果には下線を付した。評定は総括的評価結果に基づき、Aは80%以上相当、Bは60~79%相当、Cは59%以下相当の達成状況を示している。

観点間経時的評価

表より、総括的評価をみると、A児は「A・A・A・A・A」であった。学習の初めの学習活動1は「書く」と「言語」の観点が2と3で、読み取りをする学習活動2・3では「読む」と「話す・聞く」ともにほぼ3で推移し、学習のまとめとする学習活動4・5では「話す・聞く」「書く」「関心・意欲・関心」ともに3という高い安定した発達的な構造特質が認められる。このため、5観点ともAとなっている。

なお、A児のような発達傾向を示す児童は、他にクラスに4名いた。

B児は、「A・B・A・B・A」であった。学習活動1では、「書く」と「言語」の2観点が2と3であった。読み取りをする学習活動2・3では「読む」は2から3と向上しているが、「話す・聞く」は2のまま推移している。友達と意見を交換し合うことで「読む」活動を深めたものと思われる。学習活動4・5では「話す・聞く」は2のまま推移するものの、「関心・意欲・態度」及び「書く」はともに3という高い構造的な発達を示している。

なお、B児のような発達傾向を示す児童は、他にクラスに3名いた。

C児は、「A、C、B、B、B」であった。学習活動1では「書く」「言語」ともに2であった。学習活動2・3の文章から読み取ったことを根拠に発表したり、読みを深めるという段階における「読み」は2から1へと下降し、「話す・聞く」も1となっている。学習活動4・5では、「話す・聞く」が2へ上昇するとともに、「書く」も「関心・意欲・態度」も3という高い発達的な構造特質を示している。

なお、C児のような発達傾向を示す児童は、他にはいなかった。

観点内経時的評価

「関心・意欲・態度」について

A児は、3であり、読書月間に教師の紹介した「命」に関わる本を5冊読み、文学作品について高い関心を示した。

なお、A児のような傾向の児童は、他にクラスに1名いた。

B児、C児もともに3である。2人は読書月間に「命」に関わる本を2冊～4冊読んだ。特に、同じ作者の「山の命」について、「海の命とどうちがうのかな」と、興味を持って読んでいた。作品を読んだ数はA児のように多くないが、2人とも読書には意欲的に取り組んでいた。

なお、B児、C児のような傾向の児童は、他にクラスに7名いた。

「話す・聞く」について

A児は、3 3であり、高く安定した傾向を示していた。学習を理解した発言が多く、友達の意見もよく聞いていた。

なお、A児のような傾向の児童は、他にクラスに1名いた。

B児は、2 3であった。2の評価の場面は、太一の心の変化が十分に読み取ることができなくて、発表ができなかった。友達の発表から心の変化がわかり、次の評価の場面では、たくさんの意見を発表することができた。友達と発表し合うことや教師の支援から、

3へと向上したものと思われる。

なお、B児のような傾向の児童は、他にクラスに6名いた。

C児は、1 2であった。読み取りは不得意で、自分からの発表は苦手であったと思われるが、教師の支援で2へと上昇している。

なお、C児のような傾向の児童は、他にクラスに1名いた。

「書く」について

A児は、2 3 3であり、高く安定した傾向を示していた。読み取りが十分にできており、全部の学習過程を通して自分の言葉で考えや感想を書くことができた。

なお、A児のような傾向の児童は、他にクラスに2名いた。

B児は、2 3 3であった。意欲的に取り組んでおり、特に最後の感想では、自分の体験を入れて「命」について感想を書くことができ、学習の伸びを感じた。

なお、B児のような傾向の児童は、他にクラスに5名いた。

C児は、2 2 3であった。次第に自分の考えを書けるようになり、学習の定着が安定していった。

なお、C児のような傾向の児童は、他にクラスに1名いた

「読む」について

A児は、3 2 3であり、高く安定した傾向を示していた。意欲的に学習に取り組んでいた。

なお、A児のような傾向の児童は、他にクラスに1名いた。

B児は、2 2 3であった。学習過程のなかで友達と話し合ったり、自己評価を行ったりして次第に意欲的になり、伸びの状態を示していた。

なお、B児のような傾向の児童は、他にクラスに7名いた。

C児は、2 2 1であった。読み取りが苦手であり、読み取るには、教師の支援が必要であった。

なお、C児のような傾向の児童は、他にクラスにはいなかった。

「言語事項」に関して

A児、B児ともに3であり、新出漢字や読み変えの言葉を正しく読み、書くことができた。感想文などにも正しく使われていた。

なお、A児やB児のような傾向の児童は、他にクラスに8名いた。

C児は、評定が2であり、スキルテストを再度行って定着を図った。

なお、C児のような傾向の児童は、他にクラスに2名いた。